

アメリカ土木学会(ASCE)年次大会参加報告

松田光弘(正会員 土木学会事務局)

アメリカ土木学会(ASCE: American Society of Civil Engineers)の年次大会ASCE's 137th Annual Civil Engineering Conferenceが10月31日~11月3日に開催された。日本からは、石井弓夫会長、神山眞国際担当理事(東北工業大学)、松田光弘事務局参事をはじめ、約10名が参加した。

会場はフロリダ州オーランドにあるリゾートホテルBuena Vista Palaceで、ネクタイを締めたASCE大会参加者以外はTシャツ、短パンのリゾート仕様である。手線内の面積の1.5倍を有すWalt Disney Worldはホテルから至近距離にある。

ASCEは1852年創立、工学系団体ではアメリカ最古であり、土木分野と建築構造分野の両方を含み、会員数は14万人を超える。ASCE年次大会は、以前

はJSC Eの全国大会同様にテクニカルセッションが行われていたが、規模が大きくなり過ぎたので、2006年以降、分野(Institution)ごとに別途年次大会が開催されるようになった。現在の年次大会は、社会的発言、国際交流、国内の支部との連携の強化に焦点が置かれている。このため、ASCE全体の年次大会の参加者は日本ほど多くない。

1日目(10月31日)

大会1日目と2日目は国際関連行事が組まれている。

反汚職対策のセッションでは、世界銀行や国際コンサルティング・エンジニア連盟(FIDIC)から、汚職の現状と対策プログラムに関する発表がなされた。

昼食時には、パナマ運河公社から、パナマ運河の拡幅計画に関するプレゼンテーションが行われた。

中東の国際河川問題のセッションでは、ヨルダン川関連の水資源問題が中心に議論された。ASCEはレバノンやイスラエルの学会とも協力協定を結んでいることから、難しい政治問題を有することの地域の話題を採り上げることができたのであろう。

この日はちょうどハロウインの日。

写真1 カツラのサムライ2人(Jorge Padilla 前国際コンサルティングエンジニア連盟会長と石井会長。左下はフィリピン土木学会次期会長のWilly T. Go氏)



夜に開催された国際晩餐会は、世界各国から20ヶ国が参加する仮装パーティーとなった。ASCE毎年恒例の演芸大会で、JSC E代表団のプロデュースは、松田事務局参事が担当。ちよんまげのカツラを着用し(写真1)、国際円卓会議のテーマで



写真2 国際晩餐会・演芸大賞受賞後、各国代表と

あるWater Infrastructureにちなんで「ゴムホースホルン」を演奏しつつ、日本語と英語でスキヤキソング(上を向いて歩こう)を熱唱した。審査の結果、JSC E代表団は見事全米第一位に輝き、その存在を世界各国にアピールした(写真2)。

2日目(11月1日)

「Building Water Infrastructure for Sustainable Development Innovative Partnerships」をテーマとして、国際円卓会議が行われ

た。石井会長は「日本の治水の歴史と総合治水」について発表した(写真3)。このほか、数団体からの発表があった。会議全体としては、話題が大きすぎるため、発表者の話題が分散し、なかなか具体的な議論に進展しない。テーマの選定やファシリテーション技術など、会議の運営方法については一考を要すると感じた。

国際関連行事の最後となるサステイナビリティ・シンポジウムでは、田端竹千穂会員が、関西空港第二期事業に伴う環境アセスメ

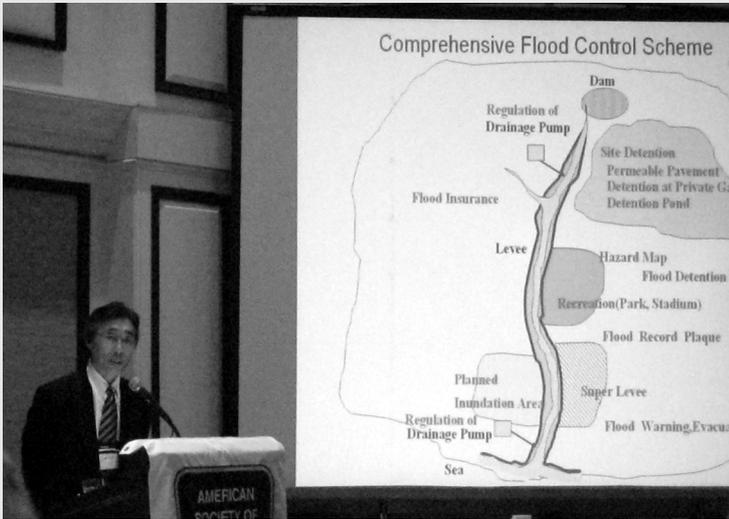


写真3 国際円卓会議で発表する石井会長

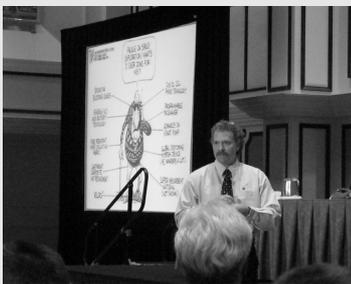


写真5 宇宙開発に関するプレゼンテーション (NASA: Russell R. Romanella氏)



写真4 関西空港第二期事業に関する田端会員の発表

JSCCE総会に相当するような会議である。会長の挨拶に続き、理事、各支部長、協定締結外国学会代表などの紹介があった。70あるASCCEとの協定締結外国学会のうち約20ヶ国からの代表が2日目までの国際関連行事に出席していたが、この紹介で起立して挨拶したのはJSCCEとエジプト学会だけであつた。ASCCEに対する礼は尽くせたであろう。

続いて、Patrick J. Natale専務理事より1年間のASCCEの活動報告がなされた。テレビ出演の多数の映像に始まり、ミネアポリスの橋梁崩落に関するコメント、議会への働きかけ、国際活動など多岐に及ぶ内容であつた。

続く表彰式では、JSCCE英国分会長の曾我健一会員 (Cambridge大学教授: 地盤工学) が、Walter L. Huber Civil Engineering Research Prize、David G. Mongan新会長 (メリランド州、Whiney, Bailey, Cox & Magnani LLC社長) は、就任演説において、女性技術者や若手技術者の増加・育成、子どもたちのコミュニケーション、国際貢献、インフラの整備と更新などについて触れ、一人ひとりの力を結集して活動を続けることよつてASCCEの2025年ビジョンが実現するということを力強く述べた。新会長と専務理事のスピーチは、JSCCEの今後の活動にとつても示唆に富むものであつた。これらのスピーチ映像は、ASCCEホームページで見ることができ (http://www.asce.org/)。また、ASCCE次期会長D. Wayne Klotz氏 (テキサス州、Klotz Associates Inc.社長) の紹介もなされた (写真7)。



写真7 右: David G. Mongan新会長、左: D. Wayne Klotz次期会長 (Photo: Courtesy of David Hathcox)



写真6 Walter L. Huber Civil Engineering Research Prize受賞後の曾我健一会員と神山眞理事

ント、モニタリング、良好な海中環境の創出などに関する発表を行った (写真4)。聴衆全員に詳細な資料が配布され、事業に対する理解が進んだと感じた。

ASCCE国内向けの行事の最初はCEOフォーラムで、ハリケーン・カトリーナの破堤原因やボストン道路地下化 (BIG DIG) における天井崩落などについての報告と討論があり、これらに関して技術者の知識、スキル、倫理がいかに重要であるかとの発言があつた。また、

土木技術者をもつと社会的に発言すべきだ (Speak out) と強調されていたのが印象的であつた。

夜のIce Breaker Receptionは、好きなスポーツチームの服装で参加しようアナウンスがあつたが、突然どう言われても…。学生も多数参加し、誰でも気軽に声をかけてくる。アメリカ人は陽気だ。

3日目 (11月2日)

この日によりやく大会の開会

4日目 (11月3日)

Annual Business Meetingは

認しつつ、帰途についた。